

# 夜の進軍らっぱ

小川未明

青空文庫



やまなかむらの村です。雪の深く積もったときは、郵便もなかなかこられないようなところでした。父親一人、息子一人のさびしい暮らしをしていましたが、息子は、戦争がはじまると召集されて、遠く戦地へ出征してお国のために働いていました。

「おじいさん、息子さんのところから、たよりがあつたかい。」と、顔を見ると村の人はきいてくれました。

「あ、こないだあつた、達者で働いているそうだ。もう、あちらは川の水も凍つたということだ。」

「まあ、達者で、お国のために働いていてくれれば結構なことだ、神さまを拜んで、めでたく凱旋するのを待っていらつしやい。」と、村人は、老人を元気づけたのです。

「なんの、お国へ捧げた悴だもの、それに今度の戦争は長いというから、無事に帰つてくるとは思っていないが、どうか、りっぱにやってくれればと祈っているのさ。」と、老人は答えました。

おじいさんは、口ではそういつても、夜が明けると、日が暮れるまで、息子の身の上を

案じていました。そして、雪が積もって道のついていないときには、郵便が山へ上がれまいと思つて、村のおけ屋まで出ていつて待つこともありました。おけ屋には、学校へいく子供もあつて、もし戦地の息子さんからきた手紙なら、かならずその日の中に届けてやるからというのであるが、おじいさんは、それが待てなかつた。ある雪のたくさん降つた日のことです。わざわざ村まで下りていつて、

「手紙はきていなかつたかいのう。」と、きいたのでした。

「いえ、こなかつたぞ、くれば、とどけてやるものを。」と、おけ屋のおかみさんは、いきました。

「あまり昨夜雪が降つて、昼前は道がなかつたから、この家へ置いていったかと思つたので。」と、おじいさんは、笑いました。

春になって雪が解ければ、夏、秋へかけては、町からこの村まで三里ばかりの間をバスが通りました。けれど、この村から、おじいさんの住んでいる山の中までは、一里近く、峠つづきの細い道を歩かなければならぬのでした。山には、幾軒も家がなかつたのです。

おけ屋のおかみさんが、いきました。

「おじいさん、町の醤油屋さん知つていなさるだろう。二、三日前あすこへ寄つたら、

このごろ毎晩、戦地からラジオの放送があつて、あちらのようすが手に取るようにわかるというこつたぞ。」

「ほう、戦地のようすがわかるとな。」と、おじいさんは、自分の耳を疑いました。

囲炉裏に火をたいて、子供のたびを乾していたおかみさんは、

「わかるつていうことだ。」と、いいました。

「ほんとうなら、きいてみたいもんだのう。」と、おじいさんは、しよぼしよぼした目を大きく開きました。

ちやうど晴れ間とみえて、日が雪の上を射しました。町へいく道には、人の影がちらほらしています。おじいさんは、山へ帰るかわりに、町の方へ向かつて、ぼつぼつ歩いていました。

醤油屋というのは、昔からある店で、この近在の人々を得意としていました。おじいさんも日ごろ知っているので、その家を訪ねたのであります。

「こんにちは。」

「おお、おじいさんか、息子さんのところから便りがありましたか。」と、店の主人がききました。

どこへいっても、知る人は、かならず息子のことをたずねてくれます。おじいさんは、うれしく思いました。これも、お国のためにつくせばこそ、みんなが、心にかけてくださるのだと、ありがたく感じていました。

「悴よ、おまえのために、私までが鼻が高いぞ。」と、老人は、心の中でのでした。「じつは、悴のいつている戦地から、ラジオでむこうのようすがわかるといので、ぜひききたいと思つてやつてきました。」と、おじいさんはいいました。

「おお、そうか、無理のないことだ。」と、主人は、おじいさんを家へ上げて、いろいろもてなしてくれました。

おじいさんは、醤油屋の主人の造つた自慢の菊の花をながめたり、かごに飼つているこまどりの声をきいたり、また、たるを洗うてつだいなどをしたりして、夜になるのを待つていました。茶の間には、いつか明るく電燈がついていたのです。

「さあ、おじいさん、ここへいらつしやい、もうすぐあちらから、きこえてくるから。」と、主人がいったので、おじいさんは、ラジオの前にすわつて、耳を傾けていました。

「おじいさん、息子さんの声がきこえるわけではないが、ただあちらのようすがわかるといだけですよ。」と、主人は、あまりおじいさんが、真剣な顔つきをしているので、

息子の声でもきくつもりでいるかと思つて、いいました。

「はい、それは、知つております。ただあちらのようすだけきけば、満足しますだ。」

このとき、アナウンサーの声が、電波に送られてきたのです。

「こちらは、〇〇野戦放送局です。いま〇〇部隊が、〇〇へ向かつて、進軍の準備に忙しいのであります。その状況をおききとってください。」

こういい終わると、ヒ、ヒン！ という軍馬のいななき声がありました。つづいて、ブーン、ブーンと、飛行機のようななり音がします。それから、タ、タ、ターというらつぱのひびき、ガタン、ガタン、ゴーという戦車の走る音がしました。

そうかと思うと、兵隊さんたちが、なにか仕事をしながら、うたっている歌の音がきこえてきたのです。

勝つてくるぞと勇ましく、

誓つて国を出たからは、

手柄立てずに死なりようか、

進軍らつぱきくたびに、

まぶたに浮かぶ旗の波……。

おじいさんの目からは、涙が流れていました。「今夜は、泊まっていらっしゃい。」と、主人はしんせつにいつてくれたけれど、おじいさんは、戦争にいつている息子のことを思えば、また息子と同じような兵士たちのことを思えば、体じゆうが熱くなつて、これしきの寒さがなんだ。暗い道がなんだという気持ちになりました。さいわいにいい月夜だったので、主人にお礼をいつて、そこを出ました。

町をはなれると、さすがに、町から村の方へいく人影は見えなかつたのです。おじいさんは、独り雪道を月の明かりで、とぼとぼと歩いて帰りました。ものすごいような青みを帯びた月の光です。雪の野原は、銀のようにかがやいて見えました。そして遠くの森の影は、黒い着物をきた人が、じつとして雪の中に立つているのに似ています。おじいさんは、いましがたラジオで聞いた、兵隊さんの歌が耳について、思い出されて、熱い涙が、ほろほろと流れてきました。

ゴウ、ゴウと、音をたて北風が募りはじめました。空を仰げば、月をかすめて、黒い雲が、幾つも連なつて、きつねかおおかみの群れが、後から後から駈けていくように、西の方から、東の空に向かつて走つていました。そして、東の空の果ては真つ暗になつて、星の光すら見えなかつたのです。



「また、吹雪ふぶきになつてきた。」と、おじいさんは独り言ひとごとをして、野原のほらの道みちを急いそいでいました。わずかに昼間ひるま、人ひとの通とおつた足跡あしあとが、雪ゆきの面おもてがついていゝるばかりでした。

たちまち、月の光つきひかりはかげつてしまつて、風かぜにまじつて、雪ゆきがちらちらと降ふり出だしておじいさんのえりもとへ入はいつたのです。

「とうとう困こまつたことになつたぞ。」

まだあちらの村むらへ着つかないうちに、まつたく目めも口くちも開あけられないような吹雪ふぶきとなつてしまいました。おじいさんは、一歩ほも、この吹雪ふぶきに向むかつては歩あるけなくなりました。

それでもおじいさんは、ようやくの思おもいで、村むらはずれの小ちいさな神じん社しゃにたどりつきました。そして軒下のきしたにちぢこまつて、吹雪ふぶきのやむのを待まっていました。知らぬ間まに疲つかれがで、うとうとと眠ねむつてしまつたのです。社やしろの境内けいだいにあるますぎの木の枝えだから、ドタ、ドタといつて、積つもつた雪ゆきが落おちました。すると粉雪こなゆきが風かぜに舞まつて、おじいさんの上うへへ吹きかかりました。

「あつ、眠ねむつてはいけな、よくこれで凍こえ死じぬのだ。」

おじいさんは、眠ねむいのを我慢がまんして、夜明よあけを待まとうと思おもいました。そして、道みちがわかるようになつたら、帰かえろうと考かんがへていました。

おじいさんは、いくら眠るまいと思つても、またうとうと眠つてしまったのでした。このとき、がやがやという人の声<sup>ひとこえ</sup>がして、おじいさんは、ふたたびおどろいて目<sup>め</sup>をさますと、吹雪<sup>ふぶき</sup>はやんで、月の光<sup>つきひかり</sup>が、明るく雪<sup>ゆき</sup>の世界<sup>せかい</sup>を照<sup>て</sup>らしていました。

「いまごろ、なんだろうな。」

顔<sup>かお</sup>を上げて、あちらの道<sup>みち</sup>を見ると、旗<sup>はた</sup>を立て、町<sup>まち</sup>の方<sup>ほう</sup>へいく、出征<sup>しゅつせい</sup>兵士<sup>へいし</sup>を見送<sup>みおく</sup>る人<sup>ひと</sup>々の群<sup>む</sup>れでした。

「おお、どこか遠<sup>とほ</sup>い村<sup>むら</sup>の人<sup>ひと</sup>で、停<sup>てい</sup>車<sup>しや</sup>場<sup>じやう</sup>へ、兵隊<sup>へいたい</sup>さんを送<sup>おく</sup>つていくのだな。」

おじいさんは、神前<sup>しんぜん</sup>の階<sup>かい</sup>段<sup>だん</sup>から身<sup>み</sup>を起<sup>お</sup>きました。そして、命<sup>いのち</sup>を助<sup>たす</sup>けてくださった神<sup>かみ</sup>さまに向<sup>む</sup>かつて、手<sup>て</sup>を合<sup>あ</sup>わせて揮<sup>お</sup>いでから、道<sup>みち</sup>の方<sup>ほう</sup>へ、雪<sup>ゆき</sup>の中<sup>なか</sup>を泳<sup>およ</sup>ぐようにして出<sup>で</sup>ていきました。

「ご苦<sup>く</sup>勞<sup>らう</sup>さんです。たいそう早<sup>はや</sup>い出<sup>で</sup>かけですのう。」と、おじいさんは、声<sup>こえ</sup>をかけました。

「はい、一番<sup>ばん</sup>に乘<sup>の</sup>りますのに、おくれてはたいへんだと思<sup>おも</sup>つて、早<sup>はや</sup>めに出<sup>で</sup>てきました。」と、兵隊<sup>へいたい</sup>さんのお父<sup>とう</sup>さんらしい人<sup>ひと</sup>が、いいました。

「吹雪<sup>ふぶき</sup>がやんでしあわせです。悴<sup>せがれ</sup>も出<sup>しゅつせい</sup>征<sup>せい</sup>していますので、私<sup>わたし</sup>も、お見送<sup>みおく</sup>りさせてもら

います。」と、おじいさんは、みんなの中なかへ加くわわりました。

「あんたは、また、どうしてこんなにお早はやく。」と、問とわれたので、おじいさんは、町まちの  
醬油屋しょうゆやでラジオを聞きいて、帰かえりにひどい吹雪ふぶきに閉とじこめられたことを歩あるきながら物語ものがた  
つたのです。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「夜の進軍喇叭」アルス

1940（昭和15）年4月

初出：「台湾日日新報 夕刊」

1939（昭和14）年3月1日、2日

※表題は底本では、「夜《よる》の進軍《しんぐん》らっぱ」となっています。

※初出時の表題は「夜の進軍喇叭」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年6月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 夜の進軍らっぱ

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>